

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Native Concept of Seasonal Cycle (months) and Agricultural Calendar of the Dourou Society in North Cameroon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 端, 信行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004636

ドゥル族の季節観と農作業暦

端 信 行*

The Native Concept of Seasonal Cycle (months) and Agricultural Calendar of the Dourou Society in North Cameroon

Nobuyuki HATA

This is a partial report of a ethnological survey of the Dourou society living in North Cameroon. This survey was undertaken from November 1969 to February 1970, and in December 1971.

I have already reported the spatial structure of the agricultural complex, under the title of "The Swidden Crops and the Planting Pattern of Dourou Agriculture in Nord Cameroun" in the Volume VIII of Kyoto University African Studies. The Dourou are swidden farmers in the Savanna woodland, planting sorghum, maize, pearl millet, rice, groundnut, cowpea, Bambarra-nut, sesame, okra in the bush field, and several kinds of yam and macabo in the yam field.

In this report I describe the Dourou agricultural calendar in terms of their concept of seasonal cycle (months), focusing on an aspect of the calendrial cycle in their agricultural complex.

In Dourou society, the native concept of seasonal cycle (months) is as follows:

Dourou's month	Gregorian calendar	Meaning in Dourou language
Dug-dug	April	Leaves coming out
Uwart	May	Name of an insect living under the ground
Waabab	June	A hut in the swidden field
Bangowa	July	Rainy days
Nag-bunni	August	Hand mill (for sorghum) is not white
Naa	September	Weeding
	October	

* 国立民族学博物館第3研究部

Dourou's month	Gregorian calendar	Meaning in Dourou language
Ziedon		To bring the fireplace into the house when it rains
Zumpui	November	Sorghum has ripened
Hom-waa	December	Lesser cold days
Hom-na'a	January	Coldest days
Zum-waa	February	Lesser hot days
Zum-na'a	March	Hottest days

* Rainy season from Dug-dug to Naa, dry season from Ziedon to Zum-na'a, at Mbé District.

It seems that this concept of seasonal cycle (months) has mainly functioned as a farming calendar among the Dourou.

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. ブッシュ焼畑における農作業暦 |
| 2. ドゥル族の居住地域とその農業形態 | 5. ヤム焼畑における農作業暦 |
| 3. ドゥル族の季節観あるいはその暦 | 6. おわりに |

1. はじめに

この小論は、カメルーン北部のアダマワ (Adamaoua) 地方に居住するドゥル (Dourou) 族に関する、実態調査の結果の一部を報告するものである。この調査は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所による、アフリカ大サバンナ学術調査隊として行われたもので¹⁾、報告者のドゥル族に関する調査は、1969年11月より1970年2月にかけての約3カ月間と1971年12月の約1カ月間の、計4カ月にわたって行われた。

調査の対象となったドゥル族は、スーダン型のサバンナに近い自然的環境のもとで焼畑を経営する焼畑農耕民である。報告者は、すでにその焼畑農業の特質に関しては、「ドゥル族の焼畑作物とその作付様式」(以下第一論文と呼ぶ)と題する報告を行った[端, 1971]。この第一論文では、報告者はドゥル農民の経営する焼畑の種類、そこで栽培されている作物類とその構成、輪作システム、作付の空間的配置を明らかにした。それは、いわば、ドゥル農耕文化の空間的構成を取り扱ったものである。

1) この調査隊は、昭和44年度ならびに昭和46年度の文部省科学研究費補助金(海外学術調査)の交付を受けている。隊長は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の富川盛道教授であった。

しかし、ひとつの農耕文化の記述としては、それだけでは十分ではない。

いま、ひとつの農耕文化というものを構造をもった複合体的概念で把握するとすれば、第一論文で明らかにしたのは、その横軸、つまり平面的構造であると言える。それは、ドゥル農民が地表に働きかけた行動体系の空間的構成であると言いかえてもよい。

ではドゥル農耕文化の縦軸、すなわち、その時系列の体系はどのような構造をもっているのだろうか。それを明らかにするのが本稿の主題である。

ところで、従来から行われている農耕文化の分析にあつては、その時系列の体系は、いわゆる農作業ないし農業労働の年間構成によって示されると考えられる。本稿においても、報告者はドゥル農民の農業労働の年間構成を記述することによって、その農耕文化の時間的側面を明らかにしたいと考えている。

しかしながら、農業労働の年間構成を記述するにあつて、問題となるのは、その場合の一年間という時間的概念がどのように構成されているかということである。

しばしば見うけられる農業労働の年間構成、いわゆる農業暦の民族誌的記述においては、必ずしもその民族の時間的概念に留意されているとは言えないようである。それらの多くは、西欧暦（グレゴリー暦）としての一年間と対応させる記述が試みられている。

しかしながら、ひとつの農耕文化を構成する農業暦は、それぞれの民族に固有の時間概念（ここでは一年間の構成）を背景にしていると考えられる。ここでいう西欧暦はいわばこちら側の概念であるから、ある民族の農業暦にとって、それが十分な分析的機能をもつとはいえないと思われる。その民族の農業暦がその民族に固有の時間概念を背景にしているとすれば、その農業暦と西欧暦との対応において、必ず時系列のうえでズレが起こらざるをえないと考えられるのである。したがって、一般にある民族の農業暦を記述し、分析するにあつては、その民族における一年間の時間概念が把握されていることが望ましく、その時間概念を西欧暦と対応させれば、農業暦の民族誌的記述は、より一層その民族文化の文脈で語るができるのではないかと考えられる。

しかしながら、どの民族も西欧暦に匹敵するような暦をもっているとは、とても望みえない。そこにこの問題の困難さがあると言えるのだが、報告者は、ドゥル族調査から、暦とは言えないまでも、彼らの季節観とでも言う一年間を構成する時間概念の一部を採集することができた。そこで本稿では、ドゥル農耕文化の農業暦を記述するにあつて、従来からとられている西欧暦との対比を一步すすめて、ドゥル農民の季節観を背景とした分析を試みたいと思うのである。

2. ドゥル族の居住地域とその農業形態

ドゥル族は、中部アフリカのカメルーン国のほぼ中央を東西に走るアダマワ山地の北縁に居住する部族である。ドゥル族は種族的にはニグリティック種族に属するが、その言語は、グリーンバーグ (J.H. Greenberg) の分類によれば、大きくはニジェール・コンゴ Niger-Congo 系に分類され、そのサブタイプとしての東部アダマワというグループに属している [GREENBERG, 1963]。その人口は、約1万5千人から2万人程度と推定されている [LAMBEZAT, 1962]。

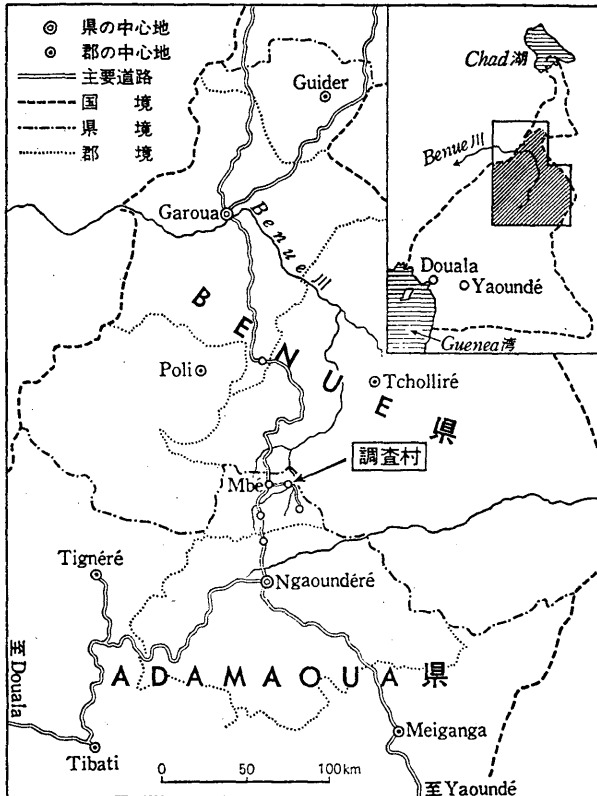


図1 カメルーン中部の概念図

このドゥル族は、行政的には、アダマワ県ムベ (Mbé) 地区を中心に、その北部につながるベヌエ (Bénoué) 県のポリ (Poli) 郡やチョリレ (Tcholliré) 郡あるいは南のンガウンデレ (Ngaoundéré) 郡などにも分散居住している。しかし、ムベ地区の中心町である Mbé には、地区役所がおかれているのと同時に、ドゥル族の伝統的首長

も居住しており、この Mbé はドゥル族の首邑であるといえる。また、このムベ地区の住民はほとんどがドゥル農民から構成されている。報告者が住み込み調査を行ったのは、このムベ地区の首邑 Mbé より東方 13km に位置するンゲセック・ガイ(Ngesek Gay) という、戸数38戸の、まずムベ地区では平均的な規模の村落であった。

カメルーン国を北部と南部とに両断しているアダマワ山地は、平均高度 1,000m を越す山塊群からなっており、その基盤岩は主に花崗岩と片麻岩から構成されている [BILLARD, 1963]。ムベ地区はこのアダマワ山地と北部のベヌエ川流域低地の間の漸移帯にあり、海拔高度は南に高く、北に低くなっている。ちなみに Mbé の海拔高度がちょうど 700m であり、ムベ地区の平均高度は、500~700m 程度と考えられる。ムベ地区の地貌起伏はさほど大きいものではなく、全体にゆるやかな準平原がつづいている。

ムベ地区の気候については、データが皆無に等しいので、詳しいことはわからないというのが実情である。ただ Mbé における年間降雨量のデータが1969年についてのみ得られた。表 1 がそれである。これによるとこの年の雨量は、予想以上に多いのである。これのみではとても平均的な特徴の判断は出来ないのだが、年間降雨量が 1,500 mm を越す年があるということは、この地域の植生を考えるうえで考慮に入れておいてもよいと思われる。なお、気温については、データは皆無であったが、調査期間中に於いて報告者が毎日の最高ならびに最低気温を測定した。この点については、ドゥル族の季節観と関連して次の章でふれることにしたい (表 2)。

表 1 Mbé における降雨量 (1969年, Post Agricole, Mbé)

1月	0 mm
2月	0
3月	91.6
4月	69.6
5月	161.7
6月	316.3
7月	355.7
8月	359.6
9月	327.0
10月	91.2
11月	22.0
12月	0
年間	1794.7

またこの地域の降雨は、比較的安定しているようで、ほぼ4月から9月までの半年間が雨期、10月から3月までが乾期にあたると考えて間違いない。表 1 でもわかるように12月から2月まではまったく降雨をみず、また、年間降雨の過半は6月から9月までの4カ月に集中しているのである。

ムベ地区の卓越的な植生は、いわゆる open woodland savanna であるといえる。しかし、集落の周辺など開墾の進んだ部分では草地 (tropical grassland) ないし灌木林 (bush forest) が広がっている。また、小さな谷をなしている小流に沿って密な河

表2 調査村における最低, 最高, 平均気温
(1969年11月30日より1970年2月14日)

	1969年11月			1969年12月			1970年1月			1970年2月		
	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均
1日				13.0	37.2	25.1	13.1	35.2	24.1	12.0	33.2	22.6
2				14.0	36.2	25.1	12.7	34.7	23.7	14.0	33.7	23.8
3				13.3	36.0	24.6	11.8	34.7	23.2	14.4	35.3	24.8
4				11.9	35.6	23.7	12.3	34.6	23.4	15.0	33.0	24.0
5				12.2	35.5	23.8	12.0	34.0	23.0	13.0	32.7	22.8
6				12.3	35.2	23.7	11.9	34.5	23.2	13.5	33.5	23.5
7				—	—	—	11.8	33.8	22.8	14.8	35.1	24.9
8				—	—	—	11.6	34.4	23.0	15.2	36.5	25.8
9				12.9	36.5	24.7	11.4	32.7	22.0	15.2	36.7	25.9
10				14.2	34.3	24.2	—	—	—	13.1	36.2	24.6
11				14.5	34.6	24.5	12.4	31.2	21.8	13.3	36.7	25.0
12				13.5	35.2	24.3	14.2	30.8	22.5	14.4	37.2	25.8
13				13.8	34.9	24.3	13.3	32.5	22.9	14.5	37.2	25.8
14				12.8	34.7	23.7	13.7	32.0	22.8	13.3	38.1	25.7
15				14.1	33.7	23.9	13.5	32.5	23.0			
16				12.4	33.7	23.0	13.6	32.5	23.0			
17				11.8	33.0	22.4	13.2	32.9	23.0			
18				11.4	32.7	22.0	14.7	33.3	24.0			
19				11.2	33.6	22.4	13.3	32.3	22.8			
20				11.8	33.3	22.5	12.0	32.4	22.2			
21				12.0	33.0	22.5	13.0	32.0	22.5			
22				11.5	33.3	22.4	12.5	33.3	22.9			
23				10.8	32.0	21.4	13.9	33.5	23.7			
24				10.4	32.2	21.3	14.0	33.3	23.6			
25				11.2	31.8	21.5	13.3	32.1	22.7			
26				10.9	32.2	21.5	14.0	33.3	23.6			
27				10.9	32.2	21.5	12.8	31.8	22.3			
28				12.3	33.8	23.0	12.8	33.0	22.9			
29				12.3	34.7	23.5	13.0	32.8	22.9			
30	13.0	36.3	24.6	13.3	34.1	23.7	12.9	32.5	22.7			
31				12.1	35.0	23.5	13.5	32.7	23.1			

辺林が発達しており、これらの植生におおわれた土地が、ドゥル農民にとって焼畑の対象となるのである。ムベ地区から北部へむかうほどサバンナ叢林が減退する傾向にあり、ムベ地区の植生は、乾燥サバンナと湿潤サバンナとの中間のタイプと云いのである [LETOUZEY, 1963]。

ドゥル農民は、このサバンナ叢林を伐りひらいて、焼畑を経営しているのである。すでに報告したように、ドゥル農民は、一般に、次のような3種類の農地を経営し

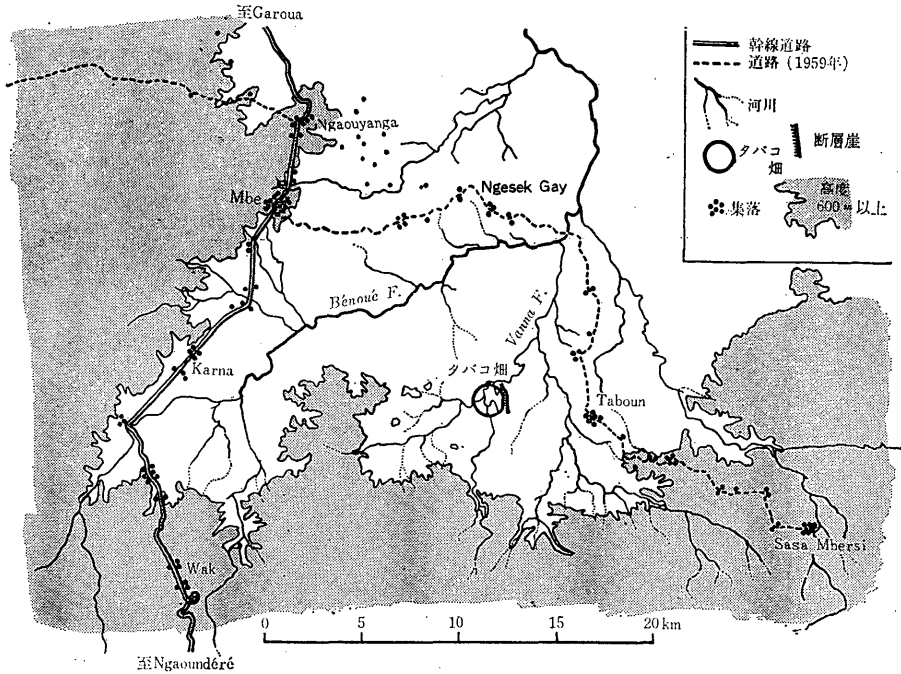


図2 Mbé 地区中心部

ていた [端, 1971]。

ブッシュ焼畑

ヤム焼畑

タバコ畑

この3種類の農地は、現在のドゥル農民にとってそれぞれ重要な意味をもつものであって、ドゥル農業はこの3種類の農地経営をその骨格としているといえる。

第1のブッシュ焼畑とは、叢林（ブッシュ）を伐りひらいて造成し、ドゥル農民が主食作物としているモロコシを中心に、他の雑穀やマメ類、ウリ類などを作付しているものである。この農地で栽培されている作物は、モロコシ *Sorghum vulgare* をはじめ、トウモロコシ *Zea mays*, トウジンビエ *Pennisetum typhoideum*, イネ *Oryza glaberrima* などの雑穀類, ラッカセイ *Arachis hypogaea*, ササゲ *Vigna sinensis*, ボアンズマメ *Voandzeia subterranea* のマメ類のほか、ウリ類4種, ゴマ *Sesamm indicus*, オクラ *Hibiscus esculentus*, サツマイモ *Ipomoea batatas* など、主要なもののみでも14種をかぞえた。これらの作物がすでに報告したように、一定の様式のもとにブッシュ焼畑に作付されるのである。このブッシュ焼畑で展開される農業は、ドゥル農耕文化の中では自給的、伝統的色彩の強いタイプと考えられ、いわゆる西アフリカのサバンナ地

帯で広く見られるスーダン型農業の範疇にはいるものである。

このブッシュ焼畑は、通例、4年ないし5年の連続した作付が行われる。その後、この農地は放棄されるのであるが、再耕作されるまでの休閑期間は、短くても6、7年、長くても20年位であると考えられる。

第2のヤム焼畑であるが、この農地ではヤム（あるいはヤムイモ *Dioscorea spp.*）がおもな作付作物となっている。ヤム焼畑は、ブッシュ焼畑とは異なり、集落の近くで造成されるのが普通である。それは、村びとの表現によると、収穫物であるヤムイモの保存、運搬の便ということがおもな原因と考えられている。このヤム焼畑の造成には、もはや叢木の伐採は行われず、草地の耕耘という作業形態がとられている。

この焼畑でのヤムの栽培は1年しか行われず、2年目にはマニオク *Manihot utilisima* が植え付けられ、まれにトウモロコシやラッカセイなどが混植されることがある。つまり、この焼畑ではヤムが初年目作物であり、2年目以降にヤムが栽培されることはないの、したがって、このヤム焼畑の経営は、毎年新しい農地造成を伴うのである。さらに、この焼畑においては、ヤムは高く土盛りされたウネに植えつけられるので、ヤム焼畑の造成には、ウネ造成の作業が欠かせないのである。この作業は、ブッシュ焼畑の造成における叢木の伐採に匹敵する大きな労働となっている。

なお、この焼畑は、2年目にマニオクなどが栽培され、その収穫がすむと放棄される。ヤム焼畑の休閑期間については、それを判断するデータを入手しえなかったが、すでに述べたように、ヤム焼畑は集落の周辺に造成されており、休閑形態もいわゆる草地休閑 (grass fallow) であることから考えると、その期間は極めて短く、数年以内のものであろうと考えられる。

さて、第3のタバコ畑であるが、これは焼畑と呼ぶことは出来ない。ドゥル農民は、図2にみられるように、調査村ンゲセック・ガイよりほぼ南方15kmの地点にタバコ畑を経営している。この地点は、ベヌエ川の一支流であるバンナ (Vanna) 川が地形性氾濫原を形成しているところであり、その広い氾濫原を利用して、ドゥル農民は乾期の間だけタバコ畑を経営しているのである。それは乾期のみ作付されるひとつの常畑であるといえる。このタバコ畑の経営とその問題点については、すでに報告を試みているので、ここではこれ以上ふれないことにしたい [端, 1972]。

このようにドゥル族は、サバンナ叢林におおわれた環境の中で、その生活の基礎を広く焼畑経営に依存している点で、典型的なアフリカ焼畑農民の一例を示しているといえよう。

3. ドゥル族の季節観あるいはその暦

ドゥル族は、一年を12カ月に区分する暦をもっていた。それは、以下に述べるような内容からすれば、暦と呼ぶことは正しくないかも知れない。しかし、ここではそれを正しく表現する言葉が見つからないので、とりあえず暦と呼んでおくことにしたい。

ドゥル族は、月を *siin* と呼んでいるが、それは同時にひと月ということをも意味している。そしてドゥル農民は、一年は12の *siin* からなると考えているのである。

しかしながら、この *siin* には日付の概念が付与されていないのである。すなわち、どの月の何日という表現も概念もないのである。ただ何々の月という考え方が共通に認識されているのである。

したがって、一年を構成している12の *siin* の期間（あるいは日数）が定まっていなのである。12の *siin* の期間がそれぞれほぼ等しいとか、あるいはどの月がきわめて短いのだとかいうような、各月の長さに関する概念は認められなかった。

むしろ、報告者が調査の過程で得た断片的な観察からすれば、ドゥル農民は *siin* の期間というものを、その年その年の実情にあわせて判断していると考えられた。

このドゥル農民の *siin* の期間の長さに対する判断を理解する助けとして、わたしたちの身近な例をもち出すことを許されれば、それはわたしたちの梅雨（つゆ）などといった概念のそれに近いと考えられる。わたしたちの社会において、梅雨は季節観を構成する概念のひとつで、たしかに暦のうで梅雨入りとか梅雨明けとかは定められてはいるものの、季節観としての梅雨の期間については、その年その年で、ことしは梅雨が長かったとか、梅雨明けが早いとか表現しているのである。ドゥル農民の *siin* の概念は、そうしたものにきわめてよく似た概念であると考えられる。

ドゥル族においては、このように期間の定まらない月の概念が12あって、それが一年間というものを構成しているのである。そこでは、相互の連続の関係は、はっきりと固定している。そしてドゥル農民は、この月が終れば、それはすでに次の月のはじまりであることから、今は何の月だとか、もう次の月に入っているとかの判断もきわめて明確に行っているのである。

このようにみれば、このドゥル族における一年を構成する12の月の概念は、とても暦と呼ぶにふさわしいものではないことがわかる。それはやはり季節観とでも呼ぶほかないものかも知れない。しかし、ドゥル農民の日々の生活にふれてみると、はたして彼らの生活のサイクルにとって、月の概念の中に日付が必要なのかどうか、各月が

正確に何日からなるということが必要なかどうか、きわめて疑問に思えてくるとも否定できない。これは、日付や定まった期間を伴ってはいないけれども、やはりドゥル農民の暦なのだと考えざるを得ない点もなくはないのである。

ここで、ドゥル族の一年を構成している12の月の概念にふれることにしたい。ただし、ここでふれる西欧暦の何月ごろであるかは、上に述べた理由できわめて便宜的なものであることは言うまでもない。

Dug-dug ドゥル農民の語るところでは、一年はこの *Dug-dug* の月からはじまるという。これは西欧暦の4月中旬から5月初旬にかけての時期にあたる。この語は、草の葉、木の葉といった内容を意味し、少し説明的に言えば、草の葉や木の葉が一斉に萌えてくる様子を示している。一般的に、このドゥル農民の居住地域では、4月頃から雨期に入ると考えられるので、この *Dug-dug* の月は、まさしく雨期のはじまりの月、そして後述するように、ブッシュ焼畑における植え付け、播種作業の開始される月にあっているのである。

落葉樹の多いこの地域のサバンナでは、乾期の間にはほとんどの木の葉が落ち、草が枯れてしまうが、何回かの降雨ののち、一斉にすべての葉が萌芽する様子を、ドゥル農民は *Dug-dug* と表現しているのである。

Uwart この語は、土の中に棲む虫の名前であるという。報告者はついにこの虫を確認することができなかったが、ドゥル農民の語るところによれば、この虫の名前が月の名として呼ばれているのは、この時期には土の中に棲んでいるこの虫が地面の上をはいまわるからであると説明している。この月は、西欧暦のほぼ5月中旬から6月初旬にかけての時期にあたる。

Waabab ドゥル農民は、その焼畑（ブッシュ焼畑）を集落からかなり離れたサバンナの中に造成することが多い。いろいろな場合があるので一概には言えないが、集落から歩いて2時間ぐらいのところに焼畑をつくるのは普通のことである。そのため、ドゥル農民は自分の経営する焼畑には、必ず出作り小屋をつくり、農繁期にはそこに泊まりこんでしまうのである。この出作り小屋のことを *Waabab* と呼んでいる。

この月は、西欧暦のほぼ6月中旬から7月初旬にかけての時期にあたり、この月が出作り小屋の名で呼ばれるのは、まさしくこの時期に出作り小屋を造ったり、手入れをしたりするからであると、ドゥル農民は説明している。

ドゥル農民の焼畑における出作り小屋は、その建物の構造からみて集落での住居とほとんど変わるところがない。円型の家屋の周囲の壁は赤土を盛りあげてつくり、その上に草でふいた円錐形の屋根をかぶせるものである。柱は中央の支柱が1本のみで

ある。こうした構造であるから、雨期に入ったこの時期には、出作り小屋を造るといっても、壁土の盛り上げなどは乾期の仕事であるから、実際には屋根を中心とする手入れ作業が行われるということである。

Bangowa この語の意味は、雨がたくさん降るということである。この月は、西欧暦のほぼ7月中旬から8月初旬にかけての時期にあたり、ドゥル農民はこの時期には毎日必ず降雨があるのだと語っている。このことは表1のデータとも対応していることがわかる。

Nag-bunni ドゥル語では、主食作物であるモロコシを製粉するスリウスのことを *nag* と呼んでいる。この *Nag-bunni* の *bunni* とは白いの否定形で、白くないという意味である。したがって *Nag-bunni* といえば、スリウスが白くないということの意味している。これはどのような事情を背景にしていることなのであろうか。

ドゥル農民が説明するところでは、スリウスが白くないということは、ふたつの事柄を意味しているという。それは、食用として穀物倉に貯蔵されていたモロコシがもはや古くなってきており、そうしたモロコシではスリウスが白くならないということと、また食用のモロコシがなくなってきてスリウスが使われなくなってきているということである。このドゥル農民の説明をそのまま解釈すると、この時期はまさしく主食作物としてのモロコシの端境期にあたっているということになる。このことは、ドゥル農民の食生活のサイクルを考えるうえで、きわめて重要な問題となると考えられる。

この月は、西欧暦のほぼ8月中旬から9月初旬にかけての時期にあたっている。

Naa これは、ドゥル語では、除草するという意味を示す。そして文字どおり、この月には、ブッシュ焼畑において、かなりな労働量をともなう除草作業が行われる。この月は、西欧暦のほぼ9月中旬から10月初旬にかけての時期にあたっている。

ドゥル農民が焼畑で行う除草作業には、その時に使用する農具によって、ふたつのタイプが認められる。ドゥル族の農具については別に報告を行ったが〔端, 1973〕、ドゥル族にきわめて特色的な農具と思われる *tong* を使用するタイプの作業と、ドゥル族が *kabok* と呼んでいる手鋤を使用するタイプのそれとである。

前者の作業は、原則として、雨期の最中に行われる伐採・開墾にともなうもので、*tong* を用いてサバンナ叢林の下草を根から掘りおこす、いわゆる根こぎの除草が行われる。この場合は、通常、ゴマの播種を行うことが、その前提となっている。

いまひとつのタイプの除草は、手鋤を用いて焼畑の雑草を掻きとる作業である。

このいずれの作業も、除草するという意味で、ドゥル農民は *naa* と呼んでいるの

である。

熱帯地域における焼畑農業にあつては、この焼畑における除草作業は、かなりの労働量を必要とするものであり、それはドゥル農民にあつても例外ではない。この時期における除草を行うにあつては、ドゥル農民はほとんどが出作り小屋に寝起きし、村には人が少なくなるのだと語っている。*Naa* とはそうした背景をもつ月なのである。

Ziedon この語の意味は、ドゥル農民の生活のサイクルを考えるうえで、きわめて興味深い内容をもっている。この月は、西欧暦のほぼ10月中旬から11月初旬にかけての時期にあつているが、すでに述べてきたように、この時期は雨期の終りにあつている。

ドゥル族の女たちは、雨期の間には、図3に示されたように、屋敷内の自分の住居（女の家と呼ばれている）の内部のイロリで食事の用意をする。しかしこのイロリのある女の

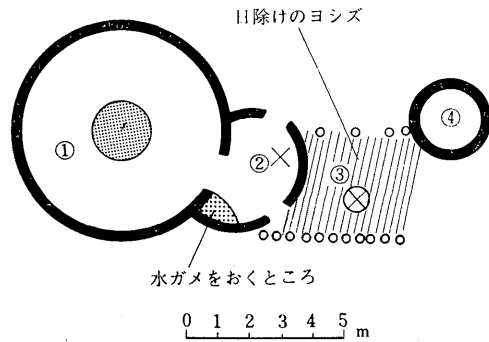
家の前室は狭いので、乾期になると、女たちは前庭に出てイロリを準備し、そこで食事の用意をすることを好む。乾期には、食事もしばしばこの前庭のイロリのそばでとられ、イロリを囲んで人と話しこんだりすることが多くみられる。

ところで、この時期は雨期の終り頃ということで、もう雨が降らないかと思つて女たちが前庭でイロリを準備すると、2、3日してやはり雨が降ってくる。そんな時には、イロリの火を屋内に移さなければならなくなる。ドゥル農民は、こうしたイロリの火を屋内に入れることを *ziedon* と呼んでいるのである。

この *ziedon* ということが、その月の名として用いられていることは、ドゥル農民の生活感覚を考察するうえで、実に興味深いことのように思われる。

Zumpui この語は、ドゥル語では、新しいモロコシが実ることを意味している。ドゥル農民は、この *Zumpui* の月とはモロコシが実るので、そろそろその収穫も始まるのだと話している。この月は、西欧暦のほぼ11月中旬から12月初旬にかけての時期にあつている。

Hom-waa ドゥル語では、*hom* とは寒いこと、寒さのことで、*waa* とは小さいと



- ① 女の家 *soolo*
- ② 女の家の前室 *nyag minu faan*
- ③ 前庭 *nyag naam*
- ④ 女の穀物倉 *aang*
- × イロリ ⊗ 乾期のイロリ

図3 屋敷地内の女の家構造とイロリの位置

いう意味である。したがって、この月の名前である *Hom-waa* とは、寒さが小さい、つまり小寒という意味である。

大陸の内陸では、一般に気温の日較差、年較差がともに大きいといわれるが、このドゥル族居住地域でもそれは例外ではなく、とりわけ乾期における夜間の冷え込みはきびしく、表2でもわかるように、乾期の毎日の最低気温は 15°C をこえることはないほどである。またこの時期の気温の日較差は、20°C 以上にも達するのである。

いずれにせよ、ドゥル農民は、この西欧暦のほぼ12月中旬から1月初旬にかけての時期を、寒さの季節としてとらえているのであり、それは夜間の冷え込みに基づいているものと考えられる。

Hom-na'a 西欧暦のほぼ1月中旬から2月初旬にかけての時期にあたると考えられるのが、この *Hom-na'a* の月で、これは大寒を意味する。乾期が深まるにつれ、日較差はますます大きくなると考えられるが、表2からみれば、*Hom-waa* の月との明確なちがいを認めることは出来ない。しかし、ドゥル農民は、小寒の月の次には大寒の月が来るのだと語っている。

Zum-waa ドゥル語では、*zum* は *hom* の反対で、暑さを意味している。この月は直訳すれば、小暑の月ということになるが、その時期は西欧暦でのほぼ2月中旬から3月初旬にかけてと考えられ、それは表2の気温測定の結果とかなり対応していることが考えられる。

Zum-na'a この月は、西欧暦のほぼ3月中旬から4月初旬にかけての時期にあっている。この時期を、ドゥル農民が暑さが大きい、すなわち大暑の月としているのは、明らかにこの地方の気候学的特徴に基づいている。それは、よく知られているように、冬季にはサハラ砂漠からの熱風ハーマッタンが広くサハラ南部の地方をおさるのであるが、ドゥル族の居住地域では、まさしくこの時期がその影響をうけるときなのである。

報告者が Mbé に居住する教会関係者に聞いたところでは、3月から4月にかけての降雨が断続的にみられはじめたところに、気温は急に上昇し、とくに暑い日が続くとのことであった。

以上がドゥル族の一年を構成する12の月である。

こうしたドゥル族の12カ月の概念をみると、いくつかの特色を読みとることができるとかと思われる。

ドゥル族の一年を構成する12カ月の、それぞれの月の概念を内容から整理してみると、

自然現象の概念……………7例

農業ないし生活のサイクル……5例

となっていることは明らかであろう。

しかしながら、たとえば *Dug-dug* の月のように、直訳的に解釈すれば自然現象の概念だが、その背景にあるものを考えると、単純にはそうと言えないものもある。

したがって、これらの12カ月の概念のなかには、ドゥル農民にとっての社会的機能としての農家暦の側面とともに、またいっぽうではドゥル農民が一年という生活のサイクルの中で、自然というものをどのようにとらえているかというドゥル族の側からの気候学的概念といった側面も認められるのである。

いずれにせよ、このドゥル族の12カ月の概念は、基本的には、ドゥル農民にとっての生活の年間サイクルと結びついた、文化複合の集約とみなすことができると考えられる。そして、その生活の年間サイクルの主要な構成が農業労働サイクルとして表出していると考えられるのではないだろうか。

報告者は、農業労働に関する聞きとり調査の中で、はじめは西欧暦の月と対比して調査をすすめていたが、ほとんどの農作業の時間的説明は、何月から何月にかけてという風に、ふたつの月にまたがったものであった。ところが、のちにドゥル族の12カ月を知ることになって、それを用いて再び農業労働の年間サイクルの調査を行ったところ、その作業はこの月に行うといった具合に、月にまたがるものがきわめて少なくなったのであった。こうした結果、ドゥル農民は、農業労働をドゥル族の12カ月の概念とを、はっきり結びつけていることが明らかになったのであった。これは、とりもなおさず、ドゥル族の12カ月の概念がその生活の年間サイクルと深く結びついていることの証左とも言えるであろう。

なお、報告者は、このドゥル族の12カ月のそれぞれの月の期間については、ここではまったく便宜的に同じ長さを与えておいたが、それはすでに述べたように、その年その年で実情にあわせて判断されているものと考えられる。

また西欧暦の月とドゥル族の12カ月とを対応させるにあたっては、1週間から10日間ほどのズレを与えているが、これは調査の中での聞きとりと、表2における気温の測定結果から判断したものである。

4. ブッシュ焼畑における農作業暦

ブッシュ焼畑における作付の特色については、すでに第一論文において報告したところである〔端, 1971〕。それによれば、同じブッシュ焼畑で栽培される作物のなか

でも、雨期の伐採の直後に栽培されるゴマ、ブッシュ焼畑に混植されるトウモロコシ、モロコシをはじめ、ラッカセイ、ササゲ、オクラ、ウリ類など、ブッシュ焼畑に連続するプロットにそれぞれ単作されるイネ、サツマイモ、ボア

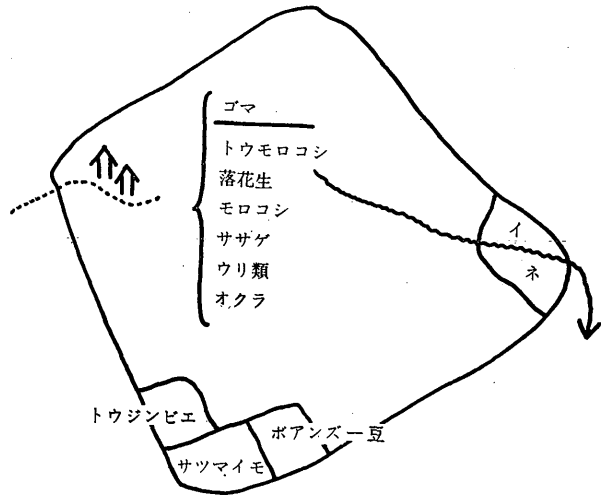


図4 ブッシュ焼畑の作付模式図

ンズーマメ、トージンビエなどによって、それぞれの農作業の形態とそのサイクルが異っている。

まず、ゴマの栽培についてみると、これはその播種時期からみて、あたかもブッシュ焼畑の初年目作物のような位置にあり、その栽培には必ず新畑の伐採を伴うのである。

ドゥル農民は、新畑の伐採を大きく分けて、年に2度行う。そしてその意味と形態はそれぞれ異っている。雨期の最中の主として *Bangowa* の月には、原則として、樹木の切りたおしを伴わない伐採を行う。それは下草を根から掘りおこす、根こぎの方法による除草作業が中心となる。樹木の枝を払うことはあるが、その切りたおしは行わない。その時使用される農具が *tong* である [端, 1973]。

一定のプロットの下草が除かれると、ゴマが播種される。このゴマの播種方法は散播による。このゴマの収穫は *Hom-waa* の月に行われるのが普通である。ゴマの栽培はこうして雨期の最中の伐採によって開かれたプロットで行われるのであり、それ以外の場面で決して行われない。

ブッシュ焼畑の本格的伐採は、乾期に入ってから *Zumpui*, *Hom-waa*, *Hom-na'a* の月に行われる。この時期は、のちに述べるような主食物であるモロコシなどの収穫、そして脱穀の作業と重なるので、伐採はその間をぬって断続的に行われているのである。そのため、この作業は、連続的ではなく、かなりの日時をかけて造成されるのである。

伐採の作業は、ドゥル語で *bok* と呼んでいる斧のみで行われる。斧はほぼ腰の高さで水平に入れて、木を切りたおす。直径が 10cm ぐらいの木より太いものが対象となっているが直径 30cm を越す樹木になると、斧を入れる位置も、通常よりは 20cm ぐらい高くなる。このような場合には、2人で両側から交互に斧を入れるが、直径 32cm の樹を切りたおすのに、2人で約6分かかっていることが観察された。樹がたおれたら、すぐに枝を払う作業に入り、この時は斧を頭上から垂直におろして、大枝から順に枝を払っていくのである。

樹木の切りたおしの場合、そのたおす方向は、その都度、判断されているようである。というのは、伐採の完了した焼畑をみると、プロットの中にいくつかの切りたおされた樹木の山が作られているからである。つまり、樹木の切りたおしには、ある程度の樹木の山が出来るように、いくつかの中心へむかって、樹をたおしていくわけである。これは明らかに、のちに行われる焼畑の火入れを考えた作業であると考えられる。

なお、この時期にはゴマの収穫が行われるので、ゴマが播種された焼畑の場合、樹木の伐採がゴマの収穫ののちに行われるのは言うまでもない。

伐採された新畑に積みあげられた樹木は、乾期のあいだ放置され、*Zum-na'a* の月に火入れされる。火入れにあたって、特定の儀礼が行われるとか、防火線をつくるとかの作業などは見られなかった。もっとも後者については、すでに述べたように、切りたおされた樹木は、焼畑のプロットの中で、いくつかの山をなして積みあげられているので、急な傾斜地でもないこの地方では、防火線の必要は認められなかった。

焼畑の火入れは、入念に何度も行われる。一回で燃えきらなかった樹木を寄せ集めて、ふたたび火入れを行い、ほとんどすべてを燃してしまうのであった。

こうして焼畑の造成が行われるが、すでにふれたように、焼畑の火入れを行う *Zum-na'a* の月には、時々降雨をみることもあり、雑草がのびはじめることがある。そのような時は、播種の前に除草が行われる。この点は必ずしも明確ではないのだが、農民によっては、この播種前の除草を重視するものもいれば、さほど重視しないものもいたのである。したがって、本稿では、これは必ずしもドゥル農民のすべてにとって共通の概念ではないし、また降雨の状態といった自然の条件によっても左右されることなので、規則的な農作業の概念には含めないことにした。

さてドゥル農民にとって、*Dug-dug* は播種の月である。ブッシュ焼畑で栽培される作物のほとんどが、この月のうちに播種されるのである。

まずブッシュ焼畑において、その作付面積の大部分を占めて混植される作物群の播種について報告する。

すでに火入れをして準備されたブッシュ焼畑に、最初に播種されるのは、通常トウモロコシである。ひとりがドゥル語で *long* と呼ばれている除草具かあるいは *long-kii* と呼ばれる掘棒で種穴を掘ってゆき、他のひとりが容器に入れたトウモロコシの種子を2、3粒ずつ種穴に播き、上から土をかぶせておく。次に播種されるのはラッカセイである。トウモロコシの播種後、数日たってトウモロコシの芽が出はじめたら、やはり同様の方法で、トウモロコシを植えたのとは別の種穴にラッカセイを播く。ラッカセイは必ず2粒ずつ播くとのことである。

さらに、ラッカセイも発芽すると、やはり同じ方法で、ひとりがトウモロコシ、ラッカセイとは異なる位置に種穴を掘り、他のひとりが4、5粒のモロコシとササゲ、ウリ類、オクラの種子をそれぞれ1粒ずつ、同じ種穴に播き、上から土をかぶせて播種が完了する。

以上の播種方法でわかるように、ドゥル農民のブッシュ焼畑では穴播方法が行われており、播種作業にあたっては、種穴掘りの作業 (*dibbling*) と播種 (*seeding*) とがはっきりしているのである。通常、前者が男子の仕事であり、後者は女子ないし子供の仕事であると言われており、播種作業における性的分業も行われているようであるが、それに付随したタブーは存在しないようであった。

ところで、ブッシュ焼畑では、このようにトウモロコシ、次いでラッカセイ、さらにモロコシなどの混植作物群と、前後3回にわけて播種が行われるのであるが、ドゥル農民はその播種作業全体をほぼ8日間から10日間ぐらいで終了するという。しかしトウモロコシの発芽を確認し、さらにラッカセイが発芽したのち、モロコシを播種するのであるから、もっと日数がかかる場合が多いのではないかと考えられる。この点については明確なデータを得ることができなかったが、ただ広い焼畑を経営している場合、播種は村びとの労働力援助によって行われることが多いので、3回にわたる播種のうちの1回は、1日ないし2日で終わってしまうということであった。このように村びとの労働力援助による共同労働の場合は、種穴を掘る作業が数列にならんで行われ、そのあとからやはり列をなして播種作業が行われるのだという。この場合でも、前者の作業は、通常男子の仕事で、後者は女子の仕事であるとのことであった。

なお、植付間隔や発芽株数など、作付密度に関するデータは、すでに第一論文に報告したのでここでは省略する。

また、この時期には、ブッシュ焼畑の縁辺の小さなプロットで、イネあるいはトウジンビエの播種が行われる。この両作物とも、それぞれのプロットに単作されるので、それらの作付面積はそれほど大きいものではなく、その播種作業も、たいていは

ひとりで行うということであった。播種の方法はいずれも穴播方法で、イネの場合は2, 3粒, トウジンビエの場合は, 5, 6粒を種穴に播くという。こうして *Dug-dug* の月は, ドゥル農民にとって播種の月であり, 一年のはじまりの月となっているのである。

播種がすんだあとの2カ月ぐらいの間は, 主な農作業は, 焼畑における除草である。除草がはじめられるのは, モロコシが発芽し, 20 cm 位の高さに成長した頃からである。除草作業は, *tong* と呼ばれる除草具や *kabok* と呼ばれる手鋤を使用して行われるが, 男子も女子も, 同じようにこの労働にたずさわるといふ。村びとの語るところによれば, 除草の仕事はとにかく大変で, しかもこの時期には, 毎日のように降雨をみるようになるので, 集落と焼畑の間の通行もしばしば困難になるので, ほとんどの村びとは焼畑の出作り小屋に泊まりこんで作業を行うとのことであった。多くの村びとは, 1カ月も家にもどらないことがあると語っている。こうした農作業の状態から考えて, ドゥル農民にとって, 焼畑の出作り小屋がいかに大きな意味をもっているかが推察され, そうした生活の表現が *Waabab* (出作り小屋) の月という概念となっていることが考えられるのである。

Bangowa の月には, トウモロコシが, *Nag-bunni* の月にはラッカセイが収穫される。

トウモロコシの収穫法は簡単で, 実った穂を手でもぎとって収穫するだけである。しかし, 穂の収穫がすんだあと, トウモロコシの茎はそのまま畑に残されず, ドゥル農民が日常身につけている *pak* と呼ばれるナイフで, 根元から10 cm から20 cm 位のところで刈りとってしまうのだという。そして残されたトウモロコシの根元の部分は, のちに行われる2回目の除草作業のときに, 雑草といっしょに除かれるのである。

収穫されたトウモロコシの穂は, 出作り小屋の付近に作られたトウモロコシ用の貯蔵庫に貯蔵される。このトウモロコシ用の貯蔵庫はモロコシのそれとは異っていて, *nbaga* と呼ばれている。これは, ツル草の一種を編んだ大きなカゴに, 内部から土を塗りつけて作られ, 通常は, 地上1 m 位の高さの簡単なヤグラの上に置かれている。上からはドゥル農民が屋根や屋敷地のまわりにめぐらす草壁に用いるイネ科の草で作った, 円錐形の屋根をかぶせている。

翌年用の種子として保存されるトウモロコシの穂は, この貯蔵庫ではなく, 出作り小屋か集落の住居のイロリの上に吊るされて, 保存されている。

またラッカセイの収穫は, 通常 *Nag-bunni* の月に行われるが, この時は, *kabok* と

呼ばれる手鋤を用いて、土ごと掘り出し、水洗いしたのち、集落の屋敷地の中庭で乾燥させ、これはモロコシ用の穀物倉に貯蔵される。

トウモロコシ、ラッカセイの収穫が終ると、ドゥル農民は再びブッシュ焼畑の除草にとりかかる。この2回目の除草は、*Naa*の月を中心にして行われる。ドゥル農民にとっては、この2回目の除草こそ、主食作物であるモロコシの収穫を約束するためには、欠かすことの出来ない重要な労働となっているのである。

モロコシ、ササゲ、オクラ、ウリ類などの収穫は、*Hom-waa*の月に入って開始される。

モロコシの収穫方法は、まずモロコシの茎を根元で折ってたおしてしまうことから始められる。折りたおすときは、数本ずつを手でたばねて一度に折ってゆくが、その方向は、ほぼ一定にしておく。折りたおされたモロコシの穂の先を手前にして持ち、*pak*と呼ばれるナイフで穂の根元を切りとるのである。この穂を切りとる作業をドゥル語では *botaa* といい、これは通常男子の仕事とされている。切りとられたモロコシの穂はカゴやヒョウタンなどの器に集めて、ドゥル語で *kwak-tut* と呼ばれる脱穀場へ運ばれる。このモロコシの穂を集めて、脱穀場へ運ぶ作業を、ドゥル農民は *ronda* と呼んでおり、これは通常は女子の仕事であるという。

このようにモロコシの収穫作業にも男女の性的分業の概念が認められるが、それはタブーを伴うものではなく、現実には、穂の切りとりには女子も参加していたのであった。

しかし *ronda* と呼ぶ、収穫されたモロコシの運搬は、男子が行うことはなく、むしろ子供がその作業に参加している場合が多くみられたのであった。

モロコシの脱穀場である *kwak-tut* は、同時にモロコシの乾燥場でもある。この *kwak-tut* は、ブッシュ焼畑に近接した小プロットを開いて作られたもので、このプロットから草木をすべて除き、集落の付近の小流に沿った土地から黒色の泥土をそのプロットに入れ、水を加えて、そのプロットの地表に薄く塗りたくって乾燥させて作るものである。そのプロットの広さは、大きいもので10m 平方ぐらい、小さいもので5m 平方ほどのプロットである。

この *kwak-tut* の中央に、モロコシの茎などを利用した低い台を敷き、その上にモロコシの穂を積み上げるのである。その積み方は、穂の先を外側にし、穂の根元を中心方向にむけて、半球状に積みあげていくのである。積みあがった形は、ちょうど半球を伏せたような形状となる。通常、さらにその上に小さな半球になるように、モロコシの穂を積みあげる。ちょうど大小ふたつの半球を重ねたようになるが、上部の小

さな半球状に積まれたモロコシの周囲や頂点には、ドゥル族のまじない（邪術）がほどこされる。これをドゥル農民は *gam-tut* と呼んでいるが、モロコシのまじないという意味である。この *gam-tut* がほどこされている、上部の小さい方の半球をなすモロコシの穂は、翌年用の種子として保存されるものとされている。

このように *kwak-tut* に積みあげられたモロコシの穂は、そのまま約1カ月間、放置・乾燥される。この間、この半球状に積みあげられたモロコシ穂の山には、鳥などの害をふせぐため、上から目の荒いムシロや網がかけられる。

Hom-na'a の月に入ると、モロコシの脱穀がはじまる。モロコシの脱穀が行われるときは、そのモロコシの所有者がまず2段に積みあげられたモロコシの山の上部の方を取り、それに付けた *gam-tut*（まじない）と一緒に脱穀場の一隅に置くことからはじまる。この作業は、必ず焼畑の経営者本人がやらなければならないとされており、調査村ンゲセック・ガイにおいては、村長のモロコシ脱穀に先だて、やはり村長自身が翌年用のモロコシの山を除く作業を行っていた。ドゥル族におけるすべての農作業の中で、この作業にはきわめて儀礼的色彩が濃厚であるように思われたが、それを説明するだけの十分なデータを入手することは出来なかった。

さて、このモロコシ脱穀は、すべて共同労働によって行われる。調査村ンゲセック・ガイの場合、モロコシの脱穀を行う村びとは、前日の夜に村の中央の広場でそのことを皆にふれておくのである。そしてその村びとの家では女が中心になって、モロコシ酒を用意するのである。

翌日には、その村びとの脱穀場に人が集まり、そのモロコシ所有者の家人からモロコシ酒のふるまいを受けながら、その村びとのモロコシの脱穀に参加するのである。

一般にドゥル農民の間で行われている労働交換あるいは共同労働には、必ず上記のようなモロコシ酒がふるまわれるのであり、ドゥル族では、こうした労働交換を「酒の仕事」と呼んでいるが、この概念はかなり広く熱帯アフリカの農民社会に認められる労働の交換形態と同一のものである。

脱穀の作業そのものは、実に単純なもので、モロコシの山（他の雑穀でも同じだが）を2mほどの棒でたたきただけである。モロコシをたたき棒は、特別に作られたものではなく、適当な太さの木を選んでその場で作られたものである。モロコシの山をたくさんの方が取りまいて脱穀をはじめのだが、よく観察しているとやはり役割分担がみうけられ、老人組はモロコシの山をたたきやすいようにくずしたり、飛び散った穂を集めたり、いわば整理的な仕事に手を出すことが多く、たたき役割を担うのはだいたい若者であった。モロコシの所有者は、これらの作業に加わることは少なく、

ブラブラしている場合がいくつか見うけられた。

このモロコシ脱穀が酒の仕事という労働交換によって行われるのは、極めて意義深いものがあると思われる。というのはそうすることによって、モロコシの脱穀は必ず一日で終らしてしまうことが原則となっているからである。モロコシの脱穀は、その所有者がひとりで、あるいは家族だけで行えるものではなく、またやったとしても何日かかるかわからないほどである。ドゥル農民は、モロコシの脱穀は一日で終らしてしまうものだと言っている。村長の焼畑など村の中の幾人かの焼畑は、調査村ンゲセック・ガイでも最大級のものであったが、当然モロコシの収穫量も村内で最大であった。このモロコシ脱穀もやはり一日で終わってしまうことが必要であって、これらの脱穀の時は、村中の人びとがその畑に集まり、早朝から脱穀をはじめ、夜に入ってもまだ終らず、ついに明け方まで続けられたのであった。

モロコシ酒を飲みながらの、こうした労働の時は、脱穀作業をすすめるために、太鼓がもちだされて、脱穀に従事する男たちを鼓舞することがしばしばであった。こうした時には、イネ科の草で顔をかくし、腰に木の葉をまとった村のカミ *guk* が現われ、共に脱穀を行うのであった。

こうして、モロコシの脱穀は、村の収穫祭のような形をとりながら、ひと月以上にもわたって続けられていたのである。

脱穀の終わったあとの脱穀場の整理は、主にその所有者の妻たちの仕事で、穂から離脱されたモロコシを集め、風せんを行い、砂や混りものをとったあと、集落の屋敷地内や出作り小屋のそばに作られたモロコシ用の穀物倉に貯蔵されるのである。そうした整理の際、穂から離れにくいモロコシは、穂のまま集められ、改めて少しずつ脱穀し、すぐ食事用に利用するのであった。

ブッシュ焼畑の一部分に単作されるイネ、トウジンビエ、サツマイモ、ポアンズーマメなどの作物については、その作付面積も小さいことから、それらの農作業はドゥル農耕文化の中で大きな位置を占めるものではない。ただそれらの季節的サイクルを確認しておく、サツマイモ、ポアンズーマメは、*Bangowa* の月に植付される。そしてポアンズーマメは、*Naa* の月には収穫されるという。また *Dug-dug* の月に播種されたイネは、*Ziedon* の月に収穫される。イネの収穫法は、*pak* と呼ばれるナイフによる穂刈りで、ドゥル農民はイネをモミのまま保存する。

サツマイモ、トウジンビエは、*Hom-na'a* の月に収穫される。とくにトウジンビエは、モロコシなどと同じ時期に収穫され、やはり脱穀場で乾燥されたのち、脱穀される。しかしこの脱穀は、その所有者がひとりで行っており、収穫量からみても、それ

で十分なのであった。それらの穀物に比べるとサツマイモの収穫は、比較的長い期間にわたって行われているようで、このサツマイモが乾期のあいだにおける農民の主食としてかなり重要な意味をもっているのであった。報告者の観察では、乾期におけるドゥル農民の焼畑における昼食は、ほとんどサツマイモであった。農民は、昼食時になると、焼畑の一角からサツマイモを掘り出して、それを煮たり、焼いたりして昼食としているのであった。

またブッシュ焼畑においてモロコシと一緒に混植されたウリ類、ササゲ、オクラの収穫も、モロコシと同じ *Hom-na'a* の月に行われる。ウリ類は、モロコシの穂が刈りとられたあと、果実を焼畑の一角に積みあげ、そのまま腐るまで放置される。果皮がたやすく破れる頃には、中の種子をつかみだし、それを洗って2、3日乾燥させ、あとは種子として保存される。またササゲはその種子が収穫、保存されるだけであって、特別な加工は加えない。しかしオクラの場合は、その集められた果菜は、ナイフなどによって輪切りされ、器に入れて乾燥される。オクラの乾燥されたものは、副食の材料として保存されるのである。

こうして、*Zum-waa* の月には、モロコシの脱穀を中心として、ブッシュ焼畑のすべての農作業が終り、その一年が終るのである。

5. ヤム焼畑における農作業暦

ヤム焼畑は、すでに述べたように集落に比較的近い土地に造成される。このヤム焼畑の造成される土地をおおっている植生は、通常、ドゥル農民が *to'o* と呼んでいるイネ科の草地である。ヤム焼畑における農作業は、この草地の開墾からはじまる。

乾期のはじまりである *Ziedon* の月に入ると、ドゥル農民は集落の近くや道路に沿った草地に適当なプロットを定め、その草を刈り取る。この草の刈り取りは、掘棒ないし除草具を用いて、草の株を根から掘りおこす方法によって行う。根から掘りおこされた草はそのままヤム焼畑の造成予定地に放置、乾燥される。この時に、ほぼヤム焼畑の形状が定まるが、のちに述べるように、ドゥル農民はヤム焼畑に何条かのウネをつくるので、ヤム焼畑はほぼ方形の形を示す。

草が刈り取られてから約1カ月から1カ月半ののち、火入れを行ってそれらの枯草をきれいに焼いてしまう。そしてヤム焼畑にウネの造成がはじまるのである。ウネの造成にあたって、普通に行われている方法は、掘棒あるいはドゥル農民が *fan* と呼んでいる三ツ又になった踏鋤で [端, 1973], 荒く列状に土を起こし、それを両側に盛り土していく方法である。近年は政府から鉄製のスコップが村に支給されており、

これも使用されていた。次には最初に掘られたミゾをさらに掘りさげ、その土を両側のウネに盛り上げる作業が続けられる。ウネをつくる前に焼かれた草灰は、そのままウネの中心部に埋めこまれていくわけである。これを何度か繰り返す、だいたいウネの高さが40 cm から60 cm、幅が100 cm 位に達するよう盛り土をしていくわけである。

このウネの長さは、通常20m から30m 位であるが、なかには60m 以上の長さのウネを造成している畑もみられた。このヤム焼畑におけるウネづくりに要する労働力はかなりのものと想像されるが、このウネづくりが行われる *Hom-waa* の月から *Hom-na'a* の月にかけては、すでに述べたように、ドゥル農民はモロコシの収穫、そして脱穀、また必要な場合は新畑の伐採とかなりの労働力を必要とする農繁期であり、報告者が観察していただだけでも、ヤム焼畑のウネづくりに労働力をさくことは、かなり無理なようであった。そのため、このヤム焼畑のウネづくりに、モロコシ酒をふるまう共同労働が行われていた。ちょうど新しいモロコシが実ったあとなので、モロコシの収穫や脱穀のあい間を縫って、ときどきヤム焼畑での労働交換がみられたのであった。

しかし、このヤム焼畑のウネづくりは、村内でも各自まちまちで、ある畑ではすでにウネが造成され、あとはいつでも植え付けられるようになっているかと思えば、他の畑はまだ全然ウネがつけられていなかったというような景観がみられたのであった。しかし遅い畑でも、だいたい *Zum-waa* の月には、ウネづくりを終えるのが普通とされている。なおウネの形状については、第一論文に詳しいのでここでは省略する。

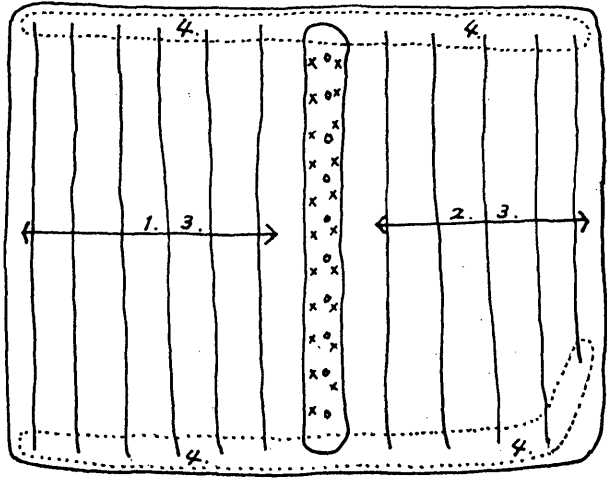
このヤム焼畑におけるウネの造成の時期は、当然ヤムの植え付け時期に影響をおよぼしているわけである。

ヤム焼畑でウネが準備されると、あとはいつでも植え付けられるのであるが、調査村ンゲセック・ガイでの観察例では、ヤムの植え付けは12月頃から3月にいたるまで見られ、その植え付け時期の集中はみられなかったのである。しかしこの理由は、前にもふれたように、ウネの造成がすみやかに進行しないためであると考えられる。ドゥル農民は、ヤムの植え付けは *Zum-waa* の月に行うものだと考えているようであった。

さて、ドゥル族のヤム焼畑では、図5に示したように、5種類のヤムとマカボ(図5の○印)を栽培している[端, 1971]。これらの植えつけ方法については、第一論文にその詳細を報告しているので、ここでは省略しておく。

このようにドゥル族におけるヤム栽培は、いずれにせよ乾期の間植えつけてしま

うもので、その地中保存の期間が長いのである。このことはこのドゥル族の居住地における雨期の長さが約6カ月間であることと関連していると考えられる。その意味では、このドゥル族におけるヤムの植えつけは、いわゆる *early planting* と呼ばれている形態にはいるものと考えられる [COURSEY, 1967]。



- | | |
|-----------|----------------|
| 1. [ngan] | 2. [baakonkaa] |
| 3. [tu'] | 4. [mbo] |
| ○ [bat] | × [haa] |

図5 ヤム焼畑の作付模式図

ヤム焼畑では、植え付けがすんでしばらくし、ヤムが芽を出す頃には、支柱をヤムとヤムの中間にたてる作業が行われる。したがって、ドゥル農民は、ヤム焼畑のウネが完成した頃から、少しずつブッシュ焼畑へ行った帰りなどに、支柱になりそうな木の枝を集めてくるのである。これはたいてい乾期の終りには完了している作業である。

完全に雨期に入った *Waabab* の月には、ヤムウネを中心に、除草作業が行われる。この時は素手か *tong* と呼ばれる除草具で行うが、ドゥル農民は、ヤム焼畑の除草は簡単でよいと話しているが、報告者が実際に観察したところでも、ヤム焼畑ではブッシュ焼畑に比べて、はるかに雑草は目立たなかった。

ヤムの1回目の収穫は *Nag-bunni* の月に行われる。この時は主に掘棒によって掘りおこされるが、通常、ひと株から3ないし4個のイモが収穫される。この時期に収穫されたイモは、食用にされることは少なく、すぐに Mbé の町へ搬出され、その市場の周辺で売られるのである。ドゥル農民にとって、ヤム栽培は、最大の現金収入源なのである。

この1回目の収穫のときは、イモの最上部より数センチ下の位置で、ヤム茎とイモとを分離せずに切断し、ヤム茎につながったまま残されたヤムイモの小片を、再び

同じヤム穴に埋めこむのである。これで2度のヤムの収穫が期待されるわけである。

ただまれにはこの段階でヤム栽培を終え、すぐウネをくずして平坦地にし、マニオクを植えつける場合もあるといわれている。

さて2回目のヤムイモの収穫は、*Hom-waa* の月に行われる。その収穫方法は1回目と同様であるが、この2回目に収穫されたヤムイモの一部は、新しいヤム焼畑に植えつけるヤムの種イモになるわけであるから、ここにおいて新しいヤム焼畑の植えつけ時期と一致ないし近接していることが望ましいわけである。しかしその点では、すでに述べたように、新しいヤム焼畑のウネの造成がはかどらないことも多く、結局、2回目の収穫にあたっては、次のヤム焼畑のための種イモをそのまま残しておくことが多いことが観察された。

そして、新しいヤム焼畑に作付するための種イモも収穫されてしまうと、ヤム焼畑は2年目の輪作にはいるわけである。そこでは再びヤムを作付しないで、ヤムウネはくずされ、平坦な畑地に造り変えられる。そして2年目作物の作付にはいるのである。

2年目作物としては、マニオクが栽培されるのが普通で、その場合には、その作付は乾期の間に行われる。マニオクの作付は挿し木方法で行われる。すなわち、約30cm前後の長さに切断されたマニオク茎を、次つぎに畑地へ挿し込んで行くのである。

マニオク畑となったヤム焼畑は、もはや村びとにとって、大きな農作業の場ではないようである。この畑にあらわれるのは女だけであり、調理用にマニオクの葉をつんだり、必要なだけのマニオクを掘り出して行くのである。こうしてヤム焼畑は、2年輪作ののち、放棄されるのである。

6. お わ り に

以上述べてきたドゥル農民の年間農作業暦をまとめたのが、表3である。本来なら、本稿においては、タバコ畑における農作業についても述べるべきであったが、この部分については別の論文において報告しているので〔端, 1972〕、重複をさけるため割愛している。しかし、ドゥル農耕文化の全体を概括するために、表3には、その農作業の骨子を入れておいた。

ところで本稿の主題は、ドゥル農民の年間農作業暦を報告することによって、ドゥル農耕文化の時系列の側面を明らかにすることであった。このドゥル農耕文化の時間的構成は、すでに報告を試みた第一論文における、ドゥル農耕文化の空間的構成と相互補完の関係にある問題である。したがって、報告者は、本稿におけるドゥル農耕文

表 3 ドゥル族における農作業暦

ドゥル の暦	Dug-dug	Uwart	Waa- bab	Ban- gowa	Nag- bunni	Naa	Ziedon	Zum- pui	Hom- waa	Hom- na'a	Zum- waa	Zum- na'a	
グレゴ リー暦	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
ブ ッ シ ュ 焼 畑	・トウモロコシ 播種	・ササゲ、オクラ モロコシ、ウリ類 播種 ・トウジンビエ 播種	・除草（1回目）	・新畑の伐採 除草 ・トウモロコシ 収穫	・ゴマの播種 新畑の伐採 除草 ・トウモロコシ 収穫	・落花生 収穫	・除草（2回目）	・イネ 収穫	・新畑の伐採	・ゴマの 収穫 ・ササゲ、オクラ モロコシ、ウリ類 収穫	・新畑の伐採 ・モロコシ 脱穀	・除草することもある 焼畑造成（火入れ）	
ヤ ム 焼 畑			・焼畑 除草		・ヤム 収穫 （1回目）	・（マニオク 植付） （焼畑再造成）	・焼畑の 造成 （草刈り）	・焼畑の 造成 （火入れ）	・焼畑の 造成 （ウネづくり）	・焼畑の 造成 （ウネづくり） ・ヤム 収穫 （2回目）	・ヤム 植付	・支柱を たてる	
タ バ コ 畑							・畑地の 造成	・苗の 移植	・つみと り			・収穫、 乾燥	
ドゥル の意味 語	草の葉、木の葉	土の中に棲む虫の名	畑の出作り小屋	雨がたくさん降る	モロコシ用のスリ	除草	雨と火を屋内に移す	新しいモロコシが実る	小寒	大寒	小暑	大暑	

化の時系列の側面の記述によって、第一論文とあわせてドゥル農耕文化複合の一応の輪郭を示すことが出来ると考えている。

そして、本稿においては、ドゥル族に固有の一年間を12カ月とする概念をよりどころに、その季節観ともあるいは暦ともいうべき時間的概念と農作業暦との対応を試みた。これは、いわば民族誌の記述のひとつの例として、その農業暦というものを、その民族に固有の時間の文脈で考察しようと試みたわけである。

ドゥル族における12カ月の概念は、その社会的機能として、単なる農家暦とみることは出来ないことは言うまでもない。それはやはり、ドゥル農民の一年間という生活のサイクルの枠組みとして考えておくべきものであろう。

しかし、本稿の記述で明らかなように、そのドゥル農民に固有の12カ月の概念という生活のサイクルの枠組みが、基本的にブッシュ焼畑における農作業暦と深く関わっていることは、報告者にとって重要な示唆である。

というのは、報告者が第一論文で試みたドゥル農耕文化の空間的構成のレベルでは、ドゥル文化の中でのブッシュ焼畑とヤム焼畑との位置づけが、きわめて並列的に認識されていたといえる。もちろんドゥル農民が主食としているのはモロコシを中心とする雑穀であったから、ブッシュ焼畑という場が、よりドゥル文化の核心に近い構図であるという考えを抱かさせてはいたけれども、それは明確な論拠をもって語れるものではなかった。

しかし、本稿の記述において明らかなことは、ドゥル文化は、基本的にその生活の年間サイクルをブッシュ焼畑の経営に結びつけているということである。ドゥル文化は、焼畑農耕民の文化である。このドゥル文化の核心は、ブッシュ焼畑における農民の行動体系であるといえる。それは何よりもドゥル族の一年のはじまりが、*Dug-dug*の月であり、それはブッシュ焼畑におけるほとんどの作物の播種の月でもあることによって明らかであるといえよう。

すでに考察を試みたように、ブッシュ焼畑における作付体系は、明らかに西アフリカにおけるスーダン農耕文化複合をなすものと考えられる。とすれば、ここにおいてドゥル文化は、基本的には、スーダン型の文化の中に位置していると考えてもよいことになる。ドゥル農民の文化は、スーダン農耕文化のひとつなのである。

ドゥル族の一年を構成する12カ月の概念は、ドゥル農民の季節観であり、自然観であり、また一年という生活のサイクルの枠組みでもあるとすれば、それはドゥル族における一年という単位での基本的な時間概念をなしているものと考えられる。この時間概念がブッシュ焼畑における農民の行動の年間構成と深く関わりあっているのでは

れば、そこにドゥル文化の基本的特徴が示されていると考えてさしつかえないと思われる。

とすれば、ドゥル文化にとって、ヤム焼畑に象徴される根栽農耕は、いったいどんな意味をもっているのだろうか。それはアフリカ文化史の深いヒダに隠されているにちがいない。

文 献

- BILLARD, P., 1963, *La Cameroun Fédéral, Tome 1. Essai de Géographie Physique*, INADES.
COURSEY, D.G., 1967, *Yams*, Longmans.
GREENBERG, J.H. 1963, *The Language of Africa*, Indiana University.
端 信行, 1971, 「ドゥル族の焼畑作物とその作付様式」『天理大学おやさと研究所研究報告』第 1 号 天理大学おやさと研究所。
———, 1972, 「北カメルーン ドゥル族のタバコ畑——アフリカ焼畑農民の土地をめぐる慣習の一例——」『天理大学学報』第84輯 天理大学学術研究会。
———, 1973, 「ドゥル族の農具, *Tong* そのほか——アフリカ農業文化の一面——」『季刊人類学』4 卷 3 号 京都大学人類学研究会。
LAMBEZAT, B., 1962, *Les Populations païennes du Nord-Cameroun et de L'Adamaoua*, ORSTOM.
LETOUZEY, R., 1963, *Flore du Cameroun*, Musée National D'Histoire Naturelle, Paris.